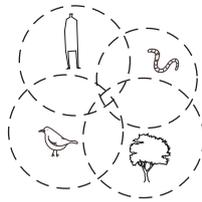




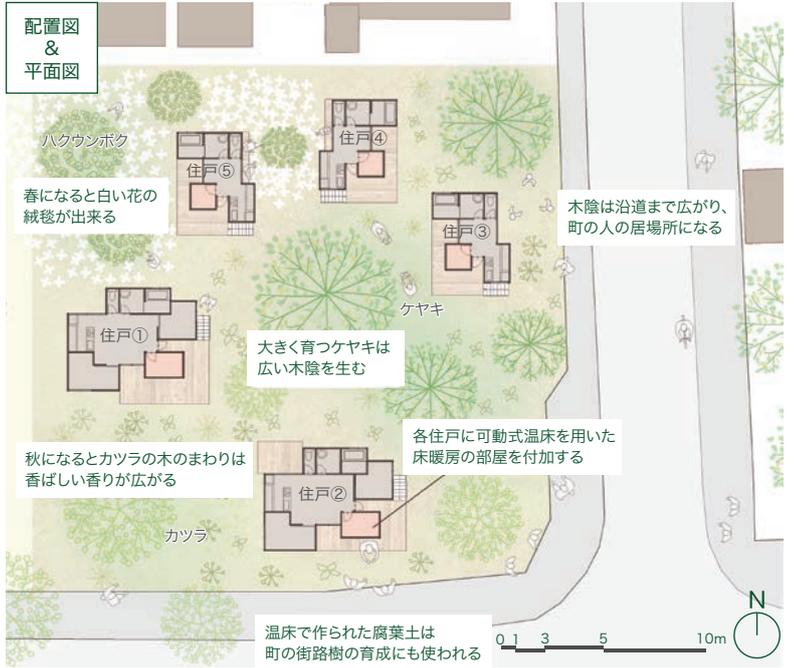
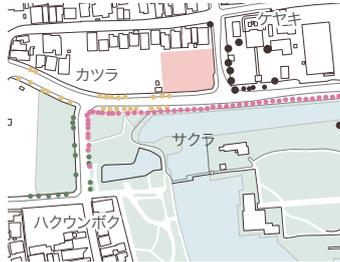
01 イエからスミカへ

家と庭を分離し、外部とのつながりを無くしている現在の家に対して、「外部環境とつながるスキマを有し、自然の営みと関わり合う」動物の棲家のような住まいを提案する。さまざまな自然の営みを取り込むことで人のための家から多様な生物が共生しあう棲家となる。

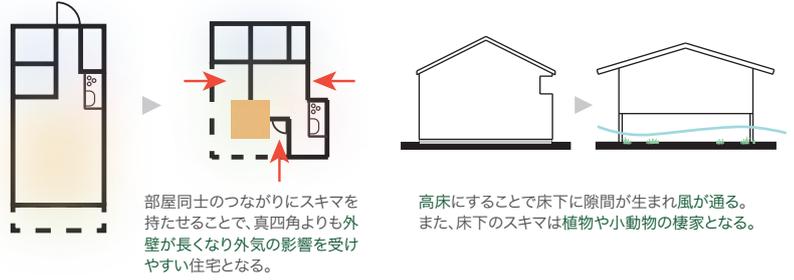


02 四季を伝える木々が彩る長野県松本市

長野県松本市は都市部にも関わらず自然豊かな環境が形成されており、カツラ並木を含めさまざまな街路樹が四季を彩る町並みが特徴である。町の街路樹の多くは落葉樹で秋になるとたくさんの落ち葉を落とす問題となっている。また、年間をとおして日照率が高く、冬は放射冷却現象によって朝晩の気温はかなり低くなることが多い。

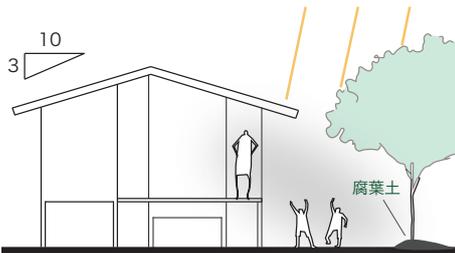


■ダイアグラム



03 自然が生む熱とつながる住まい方 ~発酵熱を用いた可動式床暖房の提案~

身近にある「自然の営みから生まれる熱」を地域の素材と捉え暮らしに取り込む



春から夏にかけて落葉樹に葉がつき軒下から庭先へ木陰のような空間が広がる



秋になると葉が落ち陽が入る日光で温床の発酵が進み熱が生まれる



秋や冬の寒い夜は、可動式温床の発酵熱を用いることで暖かく過ごす

設計コンセプト

「熱」はどこにでもあり、もっとも我々の身近にある自然素材である。しかし今、私たちは自然の熱を遮断しエアコンで室温を調節する暮らし方をしている。このような暮らし方は、私たちが本来持っている外部環境への敏感さを奪っているのではないだろうか。そこで、これからは「自然の営みが生む細やかな環境の変化を意識し、受け入れながら暮らすための住まい」が必要だと考えた。提案にあたってはまず、落ち葉による温床とその熱を蓄えるための小さな部屋を採用し発酵熱を暮らしに取り込めるようにした。発酵熱は日光のあたる量によって発酵速度と熱量が変わる特徴があるため、温床を可動式とすることで「自然の

営みが生む熱を知覚し、身の回りの自然と向き合う暮らし」が生まれると考えた。また、冬に備え木々の落ち葉を皆で集める暮らし方は集まって住むぬくもりも感じさせるだろう。次に立面・平面的に隙間を作ることで風・光・匂いといった外部環境だけでなく植物や小動物が入り込むことができ、色々な生物の居場所になると考えた。通常、壁面積が大きくなることは断熱性の観点から敬遠されるが、この住まいでは季節に応じて外部環境を調整できる。そのため外気の影響を受けやすくなるというデメリットがメリットに変わると考えた。住人が自然の営みと共生する中で、全ての生物が共生出来る環境を維持しようと思える場所こそこれからのサステナブルな住まいなのではないだろうか。

審査委員講評

日本の気候を活かして落ち葉を自然エネルギーに活用する、その新たな仕組みづくりへの挑戦に魅了された。このような取り組みは小さなコミュニティだからこそ実現性が高くなる。セキュリティ、コミュニケーションの在り方も含めて、郊外の住宅地開発の可能性を広める事例と言えるだろう。